

# 2019 年度 センター試験 生物基礎（本試験） 分析

## 全体概況

試験時間 2 科目で 60 分

大問数・解答数	大問数：3 題	解答数：18 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ● やや難化	○ 変化なし ○ やや易化 ○ 易化
問題の分量（対昨年）	● 増加	○ 変化なし ○ 減少
出題分野の変化	○ あり	● なし
出題形式の変化	○ あり	● なし
新傾向の問題	○ あり	● なし
<p><b>総評</b>                  問題の分量はやや増加（ページ数が 2 ページ増、マーク数が 1 増）。出題分野、出題形式については、変化はなかった。内容を見ると、大問ごとに 1～2 問の思考力が試される問題が見られた。昨年まではこのような出題が全体で 1 問程度しかなかったことを考えると、生物基礎の問題としてはやや難易度の高い出題であったと言える。生物基礎に費やす時間を 30 分と仮定した場合、問題の量は妥当であると思われる。</p>		

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	A 細胞と代謝 B 遺伝子	19 点	A は細胞の構造と酵素や代謝に関する問題であった。問 3 では仮説を与えた上で、それを否定するための実験を選ばせていた。実験を選ばせるような出題は珍しく、戸惑った受験生もいたかもしれない。 B は遺伝子に関する問題で、DNA の抽出、体細胞のゲノム、遺伝情報の発現について問われていた。
第 2 問	A 生物の体内環境 B 生物の体内環境	15 点	A は血液やその循環に関する問題であった。問 2 では、心臓の構造に変化が生じた場合の影響を考えさせる問題が出題されていた。理系の比較的レベルの高い大学で出題されるような内容であり、正答率は低かったのではないかとと思われる。 B は免疫に関する問題であった。
第 3 問	A 生態系 B バイオーム、植生の遷移	16 点	A は窒素循環とエネルギーの移動に関する問題であった。 B はバイオームと陽樹・陰樹の光合成に関する問題であった。問 3 は、資料を基に葉の厚さについて考察する問題、問 5 は 2 つの実験の結果から土壤中の種子の種類を考える問題が出題されていた。一部の教科書で「参考」や「コラム」として記載されているが、多くの受験生にとっては初めて見る内容だったのではないだろうか。